

アルケイアー記録・情報・歴史
第七号 二〇一三年三月 七三―一三〇頁
南山大学史料室

建築家アントニン・レーモンドの見た「自然」

―山里キャンパス建設をとおしてみた

ランドスケープ形成の民族誌的研究―

坂井信三

南山大学人文学部人類文化学科

La nature qu'a vue l'architecte Antonin Raymond: une étude ethnographique sur la transformation d'un paysage

Département d'anthropologie et de philosophie, Faculté des Sciences Humaines,
Université Nanzan

SAKAI, Shinzo

archeia: documents, information and history
No.7 March, 2013 pp.73-130
Nanzan University Archives

- 一 はじめに
- 二 ランドスケープの要素
- 三 バックグラウンド
 - 三―一 立地と眺望
 - 三―二 植生
 - 三―三 街路
- 四 ネゴシエーション
 - 四―一 敷地の形状
 - 四―二 土質
 - 四―三 樹木
- 五 まとめと展望
 - 五―一 明らかになったこと
 - 五―二 ランドスケープの構造

建築家アントニン・レーモンドの見た「自然」

―山里キャンパス建設をとおしてみたランドスケープ形成の民族誌的研究―

坂井信三

一 はじめに

南山大学の山里キャンパスを設計した建築家アントニン・レーモンド（一八八八―一九七六）が、この地の「自然を基本として」キャンパス全体を一体的に構想したことはよく知られている。その意図は当時の建築界からも好意的に迎えられ、「与えられた自然との調和と機能的な校舎群との結びつきのなから、これまで見られなかった大学校舎群の新しい空間的秩序を創造した」（日本建築学会 一九六五・五五五）と評価されて、一九六五年に日本建築学会賞を授与されている。第一期工事が終了し建物群の主要部分が完成した一九六四年に、レーモンドが書いた「自然を基本として」（レーモンド 一九六四^a）という文章の冒頭部分を引用してみよう。

新しい南山大学の設計をするため、シュライバー神父、私の妻、そして私の三人がその敷地を見に行ったのは、

一九六一年（昭和三十六年）の七月か八月のある大変暑い日でした。私達は敷地にある岡や、谷や、狭い道や、低いがよく繁った雑木林など、敷地内を隈なく歩き回りましたが、そのうち特に私の注意を惹いたのは、尾根に続いている細い道でした。その尾根は敷地の背骨のような形をしていました。そこは四方から微風を受け、東西両方向に素晴らしい眺望を持っていましたので、私はその時その場で直ぐその尾根道を敷地計画の基本とする事に決めました。私は建物によって区切られた空間を通じて眺める事ができるこの道路に跨って立つ数々の建物や、部分的にそれらの建物の中を一直線に突き抜けて北と南に眺望の開けたところへ通じるこの道路を目に浮かべることが出来ました。私はその時例え予算が非常に限られていても、また多少の反対が起こりうるとしても、この中心となる考えを敢えて実現する決心をしました。

この非常に印象的な文章は、彼がはじめて建設予定地の丘陵を訪れたときに得た直観を、その時その場で、五感をとおして受けた身体感覚のままに書きとめている。

最初の敷地訪問のちょうど一年後、この地に大学新校舎を建設することが学園理事会で決定され、建築のマスタープランが定まって工事が始まった時点（一九六二年八月）で彼が書いた文章「南山大学総合計画」（レーモンド一九六二）にも、同様の直観が強く表現されている。

デザインは当初から明瞭であった。大学は一体として風物の一部となり、決してつなぎあわされた個々の建物ではないのだ。至る所見晴らしはよく、山のうねりは関西特有の緑で覆われ、貫かれた山稜の尾根道はそのまま主要交通路として最終的解決策でもあった。自然のままの形と植物とは、およそ人工では追いつけぬ価値あ

るものとして、出来る限り保存するつもりであったのは事実である。また、私の昔からの基本の考え方からすれば、方位は天与のものである。冬の太陽も夏のそよ風もその取捨はいずれも日本人の深遠な考え方の中にこそあった（レーモンド一九六二・一九）。

これらの文章からは、レーモンドがキャンパスを設計するにあたって、当初から気象、方位、地形、植物などの自然条件を変更することのできない所与の条件として受け入れ、それらの自然条件と人工物としての建物群の機能的要求を調和させることに、建築家として一つの挑戦を見出していたことが読み取られる。そのこと自体はこれまでにレーモンド自身の著作や、レーモンドの建築に関する研究でくり返し指摘されてきたことである。³⁾

だが彼が「自然を基本として」といったとき、その「自然」とは一体何を指していたのだろうか。というのも、彼がはじめて建設予定地に立ったときに見た「自然」は、これから見るとおり、当時の状況を再現してみる限り決して豊かな「自然」とはいいがたい、むしろ荒廃したものであったと思われるからである。

それにもかかわらず、彼がはじめて建設予定地を訪れたときに直観した「自然」は、キャンパス全体の構想とその実現に対して決定的に重要な意味をもった。その直観が実際どんなものだったのかを、彼が上掲の文章に書き表した以上に深く知ることははや不可能である。だがそうした直観があったとして、それがどのような構成要素からなり、どのようにして計画の実現を導いていったのかを、利用可能な資料から検証してみることはある程度可能である。

一九六四年に主要部分の完成した山里キャンパスは、やがて五〇年周年を迎えようとしている。大学の規模拡大とともに校舎は次々と増築され、老朽化した当初の建物群は改築か保存かの決断を迫られている。この論文はそう

した時期にあたって、レーモンドのキャンパス構想の成り立ちと実現の過程を再検討してみようとするものである。

ただしここでの私の目的は、今後のキャンパス構想に対して何らかの提言をすることにはない。私はこの論文で、アントニン・レーモンドによるキャンパスの構想・設計・建設が所与のランドスケープの中でどのようにして着想され、その着想が一定の地理的、歴史的、社会的な条件を担った敷地の中に現実の建物群として実現していく過程をとおして、どのようにして新たなランドスケープを生み出していったか、その具体的な過程をたどってみたいと思っている。その意図するところは、長期的にいえば、世界―内―存在としての人間が、世界とかわり世界の中で何かを作り上げていくことをとおして、そこを固有の相貌をもった生の場所にしていく様相を探求したいという遠い目標に方向づけられている。私はこのような志向性をもつ探求を、私たち人間が日々やっていること、日々生きていくことの民族誌的探求として位置づけている。この探求は私自身にとつてまだ始まったばかりであり、少しずつその方法を鍛錬していこうとしているところである（坂井二〇一二）。したがってこの論考は、建築という活動を、残された資料から民族誌的に探求してみることとおして、人間の生活の場の形成と変容に関わる諸要件を探る初歩的な試みとして位置づけられる。

二 ランドスケープの要素

レーモンドのもとでキャンパス設計の実務にあたり、建築を担当した同建築設計事務所の五代信作は、冒頭に示したレーモンド独特の強い印象的な文章とはちがって、もう少し実務家的に、この挑戦が建築家にとってどのような

な課題をつきつけるものだったかを説明している。

この約五〇、〇〇〇坪の敷地は名古屋市の東山公園に連なる丘陵地帯の一部にあたり、市街地に隣接した風致地区にあって高低起伏が多く、地方独特の赤はだをのぞかせて矮小の松、針葉樹が繁茂し、標高六四メートルの岡の上は風通しが良く全市街はもとより遠く木曾、鈴鹿の山々を望見する素晴らしい眺望を持っている。

配置計画を特徴付けるものは、敷地の中央を南北に貫通する幹線道路であるが、これは旧い丘陵の尾根の小路がそのまま生かされているのであって、この道路は中央線が南北を軸にして東に一二度ふれるという理想的な方位をとることになり、これは同時に全体の配置計画を単純化することになった（五代 一九六四a）。

同年に発表されたほぼ同内容の別稿では、敷地の地形的、地質的条件が設計の基本的方向性を決定したことを次のように指摘している。

基本設計中レーモンドにいつも云われたことは、この自然に恵まれた環境を生かして、天然の樹木を最大限保存することであって、これがデザインの根本になる。丘陵の尾根の小路が残されて一本の幹線道路となり、適切な方位をもって全体の動線計画によって配置された八棟の建物は、それぞれ置かれた地形を生かして土の移動を最小限にして、全体が土地の起伏によくなじむように意図されたもので、敷地を立体的に利用しているが、意識的に造形されたものはひとつもない。

これは土質が降雨流出によりエロージョンを起こしやすく、樹木の移植、植付の困難な土地柄なので、天然の

樹木を保護残置するよう計画されたものであるが、樹木の育成に年月を要することからもっとも適切な経済的処理であった（五代 一九六四b・九五―九六）。

レーモンドと五代の文章にくり返し出てくる言葉として、眺望、方位、丘の尾根道、天然の樹木、高低起伏の多い地形、降雨による浸食（エロージョン）などがある。これらはおそらく設計・建築を進めるレーモンドの事務所の中で、スタッフたちに共有されたキーワードだったのだろう。つまりこれらは、彼らにとつて所与のランドスケープを構成する要素として、建築計画の基礎となるべき「自然」として受け取られただけでなく、将来に向かつて建築物がその一部となるべき「風物」としても、つまり建築物とともに新しいランドスケープを構成するべき要件としても、とくに留意された要素を示しているとみなしていいだろう。そこで以下にそれらの要素を手がかりにして、山里キャンパスのランドスケープの成立について検討していこう。

その際、作業を大きく二つのレベルに分ける。第一のレベルは、キャンパス予定地の立地、あるいはキャンパスの外延に広がる環境に関わっている。これは名古屋という土地の歴史とそこで教育事業を行う南山学園の選択に関わる部分であり、事実上建築家はそれを左右することができない。それに対してキャンパスそのものの景観、形状に関わるレベルでは、建築家は一定のプランによってランドスケープを作り変えていくことができる。いいかえれば、第一のレベルは建築のバックグラウンドをなす自然や歴史の大文脈を構成しており、第二のレベルは建築家の設計思想と現場におけるその実行可能性とのネゴシエーションから構成されている。

三 バックグラウンド

建築物、あるいは建築という活動は、当然それに先行するその土地の自然や歴史の大きな文脈の中にある。以下ではそうした建築のバックグラウンドとなった諸条件を、キャンパスを取りまく立地と眺望、植生、街路の三つの要素から検討していく。

三―一 立地と眺望

「至る所見晴らしはよく、山のうねりは関西特有の緑で覆われ」（レーモンド一九六二）、「その尾根道は敷地の背骨のような形をしていました。そこは四方から微風を受け、東西両方向に素晴らしい眺望を持っていました」（レーモンド一九六四a）。

レーモンドはごく短い文章で、建築家らしい正確な観察力を示している。名古屋市東部のいわゆる東山丘陵は、尾張平野の東に広がる丘陵の西端にあたり、全体として北および東に高く、南および西に低くなる（新修名古屋市史編集委員会 一九九七・三六一―三七七）。そのため名古屋市中心部から東山丘陵に登ってくると、次第に広い眺望が開けてくる。東には遠く三河から奥三河へと幾重にも続く山々がのぞまれ、ふり返れば西には名古屋の市街全域と伊勢湾の向こうの鈴鹿山地までが視野に入ってくる。おそらくレーモンドらは移転前の南山大学があった杖中から滝川町の狭い谷をさかのぼり、途中で左手の急な斜面を登って現地に立ったのだろう。そのときの開放感が尾根道の空気の動きとともに伝わってくる文章である。

現在のデジタル標高地形図^①で見ると、このあたりには標高四〇メートルから八〇メートルほどの丘が南北に尾根

を並べてならんでいるのが見える(図1)。杖中から東に入った谷筋の北側が山里キャンパスの敷地で、谷に面する急斜面を登るとその向こうの尾根は北側に向かってなだらかに下っている。丘の間には自然の水流にしたがって狭い谷が北に向かって幾筋か刻まれている。大学のキャンパスとなる予定地は、最高地点で約六四メートルの高さをもつ尾根ひとつと、その両側の谷と尾根の一部にまたがっていた。

旧八事村から旧末盛村にわたって広がる東山丘陵の眺望は、江戸時代から名古屋城下の市民たちに親しまれていた。もともと飯田街道の南北に広がるこのあたりは、「尾張高野」と呼ばれた一大宗教地区をなしており(木島一九二七・八〇)、一九世紀半ばの天保年間に出版された『尾張名所圖會』には、音聞山、天道山、興正寺、香積院、般若台など風光絶佳の名所がいくつか収録されている。於保俊・松原輝夫は、近世の村絵図や『尾張名所圖會』の図録をもとに江戸末期ごろの東山丘陵の景観と植生を復元しているが、それによるとこの地域の丘陵一帯は見晴らしのいいアカマツの疎林で、南には遠く伊勢湾の海岸線も見渡せたことがわかる。アカマツの疎林には特徴的にコバノミツバツジが生育し、春には赤紫の花をつける。そのため樹木がまばらで見晴らしいこの一帯は、春先にツツジの花見に城下の市民が訪れる都市近郊の行楽地となっていたことが知られている(図2)(木島一九二七・八一、於保・松原二〇〇五・一三一―一三二)。

名古屋の市街地は、明治二四年の土地利用図に明瞭に見取ることができるとおり、もともと低い台地(熱田台地)上に城下町として成立したもので、その西側の沖積低地は水田、東側に続く台地は畑地、そしてさらに東の丘陵は山林というように、地理的・生態学的条件に即応して生活域が展開していた。明治期に入って、人口増加とともに市域は東に向かって拡大しはじめ、平行して一九二六年(大正一五年)の都市緑地計画によって丘陵地帯に東山公園(一九三五年昭和一〇年開園)などの公園緑地が順次整備されていく。近世名古屋の日帰りの行楽地であっ



図1 デジタル標高地形図

- ・外側の枠は地図1, 2と対応
- ・中間の枠は八事土地区画整理全図と対応
- ・最小の枠はキャンパス敷地



図2『尾張名所図會』東山の春興

た東山丘陵は、こうして昭和の初めごろまでには市民の生活域に編入されていく（新修名古屋市史編集委員会一九九七・二四〇―二五一）。

三二 植生

ところでアカマツの疎林が形成されてくる歴史的要因については、千葉徳爾の著名な研究『はげ山の研究』がある（千葉一九九一）。千葉は近世以降日本各地に広がった人為的荒廢林地（はげ山）の歴史的形成過程を究明する中で、アカマツを主な樹種とする疎林の意義を明らかにしている。

それによると、林地を荒廢させはげ山化する要因は、人為的に植生がしばしば破壊されるために、土壌の物理的化学的性質が変化して植生の生育に不良な状態となることにある。そうした荒廢の背景には、近世以降の市場経済化によって農村の林地利用形態が変化し、入会林地などの共同利益地の過剰利用が進んだことがある。「近世に入って林産物が商品化され農業経営が全体として自給的経営か

ら商品生産経営に移行するにつれ、共同体的な林地所有との矛盾があらわれるようになった。一は農産物の商品化にともなう施肥の増大が採草地の過度利用となつてこれを荒廃させたことである。二は農業経営の分割、小農化が多数の窮乏農民を生み出し、これらが生計のため共同益地の生産物を過度に利用し、甚だしい場合はこれを販売するまでになつたことである。……所有と生産力のくいちがいが林地の過度使用として地域に反映したのがはげ山型荒廃であるといえよう。そのように荒廃し、変成した土壤にもお生育する樹種が、アカマツなのである（千葉一九九一…二一九—二二〇）。

実際於保・松原によると、近世の村絵図^①では東山丘陵の多くは農民たちが一定の年貢や冥加金を払つて薪、芝や^{まぐさ}稗、屋根茅、畑の肥料などの収穫に利用する「定納山」、「平山」などとよばれる林域として示されている。そうした長年にわたる森林資源の収奪とそれに起因する表層土壤の乾燥および浸食流失が、近世の東山丘陵を見晴らしのいいアカマツの疎林にしたのだと理解できるだろう（於保・松原 二〇〇五…一三一—一三四）。

於保・松原によると、「川名山の広い範囲は現在南山大学の敷地である。この一部は天神山と呼ばれていたらしいが、やはりマツ疎林であつたろう」（於保・松原二〇〇五…一三七）。レーモンドらが登つてきたキャンパス予定地も、それに近い状態だったのだろうか。

ところが一九六〇年ごろのレーモンドらの文章には、広々とした眺望はよく描かれているが、アカマツの疎林に関する言及はない。むしろ樹木として言及されているのは、「低いがよく繁った雑木林」（レーモンド 一九六四 a）、「矮小の松」（五代 一九六四 a…一一九）、「背の低い赤松」（三沢 一九九八…一八八）である。また、当時南山大学の施設課長だった山本勇郎氏は、南山学園創立75周年記念誌でキャンパス予定地を「人の背丈ほどの松と雑木がまばらに生えている荒れ地」だったと回顧している（南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七…

一五三)。ここに見られるのは、明らかに『尾張名所圖會』に描かれたようなアカマツの疎林ではない。

実は八事や東山の山林は、過去一〇〇年ほどの時間をさかのぼってみると、何度かの激しい破壊・荒廃をこうむって来たらしいことがわかる。後に述べるように八事周辺は早くも一九二〇年代から計画的な都市開発の対象となつたところだが、そのひとつの要因は森林の破壊に対する危機感があつたようだ。

八事周辺の大規模な都市計画を企画し立案した「都市創作会」は、一九二七年（昭和二年）にその機関誌『都市創作』で「名古屋市郊外に於ける絶好の高層〔高燥か〕住居地帯」として八事を紹介する特集を組んでいる。その中の八事の過去から現在（当時）までの変遷をたどる記事によると、かつて「海風時には近く浪聲を送ってきて松風の音と調ゆかしき交響楽を奏でた閑寂境」も、明治初期「恐らく封建改革や地券発行やら等の事のあつたとき、……過渡期のドサクサに紛れてこの美しい深林樹帯も、惜しや心無しの人々によって木は濫伐され、山の地肌は剥き出されて台なしにされて終いました」。「この有様を見て慨いたのは当時愛知郡長たりし笹原辰太郎」であつた。彼は「大名古屋の発展への動きを觀て、假令ば京都に於ける東山が名古屋にも早晚必ず必要を叫ばれるに違いない」と予想して、明治末期に土地所有者、一般篤志家を組織して「八事保勝会」を作つた（木島 一九二七・七八―八二）。こうして始まつた八事の再開発運動は、第一世界大戦後の好景気にも助けられて、放置された山林の高級住宅地への転換をねらつた八事土地整理組合に発展し、それが一九二〇年（大正九年）に始まる行政側の都市開発計画と合流して、八事の土地整理事業が実現したのである（堀田 二〇〇〇）。

しかし明治期の荒廃以上に深刻だったのは、おそらく第二次世界大戦の戦中・戦後の時期だつたらうと思われる（於保・松原二〇〇五・一三五）。敗戦をはさんだ一九三五年、一九四七年、一九五九年の三つの時期に撮影された空中写真をくらべてみると（図3）、敗戦直後の一九四七年には、八事から東山にかけての山林の中でも、とく



a 1935年陸軍



b 1947年米軍



c 1959年国土地理院

図3 空中写真の比較
枠はキャンパス敷地

に後の川名中学から南山大学のキャンパスになるあたりの場所がほとんどまったく樹木のない裸地になってしまっているのがわかる。傾斜地はあちこち浸食されて崩れ、土壌は雨のために流出し、爆弾の痕も点々と見える。近隣住民の方々の話によると、この場所には大戦中に高射砲部隊の陣地が置かれていたが、敗戦後に立木はみな燃料のために伐採されてしまったのだそうである。林地の管理責任がはつきりしている興正寺、伊勝神社などの寺社や個人の土地では、そのような激しい破壊はなかったことが写真からも読みとれるのである。

レモンドらがこの場所を訪れたのは、敗戦から一五年ほどたった一九六一年だった。その間に、まったく裸になるまで伐採されてしまった樹木は、一九五九年の空中写真に見るとおり少しずつ回復してきていた。それが彼らの見た「低いがよく繁った雑木林」なのだと考えられるだろう。

興味深いことに、一九六〇年代初頭は日本の社会にとってエネルギーの大きな転換期にあたっている。薪炭は化石燃料にかわり、田畑の肥料にも化学肥料が広く使われるようになる。都市近郊の農地は宅地に転換され、燃料・肥料の収穫地であった里山は手入れしなくなり、その結果かつてはつねに乾燥していた林床は湿潤になって、アカマツの疎林に代わって密生した下生えが増えてくる。そしてこれ以降、近世東山のアカマツ疎林の景観は姿を消していく。戦後日本のエネルギー革命が生態系に反映されはじめるまさにちょうどその時期に、レモンドはこの丘陵地を訪れたのである。

三―三 街路

このように見てくると、レモンドらが「自然のままの形と植物」、「天然の樹木」と受け取った植生は、大きな時代の変遷の中で、人間の営為とともに遷移してきた生態系の中にあつたことがわかってくる。そしてもうひとつ、

既存の植物とともにレーモンドの直観の中心軸となった「尾根道」を含む街路について検証を進めていくと、さらに複雑な様相が明らかになってくる。

すでにふれたように、八事周辺は早くも一九二〇年代から区画整理事業が進み、一九三二年には一応の完成を見ている。この事業は、黒谷了太郎、石川栄耀（ひであき）らの都市計画官僚が民間の土地整理組合と手をたずさえて（新修名古屋市史編纂委員会 二〇〇〇・三八五―三八七）、西欧の田園都市の思想に影響を受けた「山林都市」構想を名古屋市東郊の丘陵地で実現しようとしたものである。堀田が指摘するとおり、そこで問題になったのは近世以前の里山を近代における郊外住宅地に変容させる上で、山林という特質を住宅地にどのように取りこむかという課題であった（堀田 二〇〇〇・二三九）。

起伏の激しい八事の丘陵地帯を住宅地に変容させるために、彼らがとくに注意をはらったのは、排水系統と道路系統を地形条件に調和させることだったが、都市開発グループの残した記録からうかがえる。⁽⁸⁾黒田・石川の指導の下で設計を担当した造園技師狩野力は、区画整理の実行指針を次のようにまとめている。

〔等高線を詳細に描き込んだ地図を作った上で〕丘陵の峯を辿って主なる排水系統を見る。市街地との連絡は自然平地との連絡であり、幹線道路は近い谷合、すなわち排水線と一致する事は云ふまでもないからだ。綜て排水線に逆らった路線配置即ちバンマニング（バンディング）（ペンディング？）して谷合ひを横切る道路は風致を傷つけ住宅敷地を埋土して築かしめる事となり将来の道路排水路の維持に大きな困難を齎す訳となるものである。連絡路は多少の無理も忍ばねばならぬが地区内道路はすべて気分のいい高級住宅地らしい緩い曲線道路で終始したい。……無理のない配線を考へる場合に於いては在来からの踏み分け路、木樵の道とも云ふものを充分玩味すると

面白い。それ等は主に日当たりのいい峯の上か、中腹の如き見晴らしのきく乾いたところを通って居るもので、こういう位置が丘の上の道として自然的にも維持せられ、また将来に亘っていい位置に違ひない。

中広い丘の背であれば中央近くには非道が欲しい。それは眺望のためにも丘其のものを十分利用する上からも両側に宅地が得られる上からも、望ましい配線である。……中腹の道は住宅地道としては一番親しみのあるもので、……すべて道は丘や谷のうねりに添ふて、等同線（イソメタ）になるべく平行に造りたいが、それでは道路の大切な使命である便利といふことが果たされなくなつて終ふ。……連絡ある道路は勾配を緩やかに緩やかに心がけながら常にさうする（狩野 一九三二・三八―三九）。

このように起伏と排水という自然の条件を優先しつつ、景観と生活上の便宜を考慮して設計された道路は、その機能と規模によって幅員十三間半の「幹線道路」、主要道路に直交して宅地割りを形成する幅員三間以上六間未満の「支線」、そして住宅地の間を縫うように設定された「輪環道路」の三種に分けられた。「名古屋市八事土地整理組合地区全図」（図4、堀田 二〇〇〇・二三二から転載）を見れば、それら三種の道路が明瞭に見分けられるだろう。

一九六四年に南山大学のキャンパスが造られることになる丘陵地は、実はその三〇年前にこうした大規模開発によって道路が敷設された場所だったのである。そのことを確認した上で、開発以前（一八八三年）の地図1と開発以後（一九三八年）の地図2（9）を参照しつつ、キャンパスとその周辺の道の変遷を検証してみよう。

さて於保・松原は前掲論文で、現在の飯田街道（国道一五三号線）に対応する「駿河町街道」（地図1の①）と現在の東山通り（名東本通りに相当する「高針道」の二つの幹線道路（同じく②）には含まれた地域を考察の対象としている（於保・松原 二〇〇五・一二八）。その範囲はちょうどここで検討しようとしている区域と重なつて

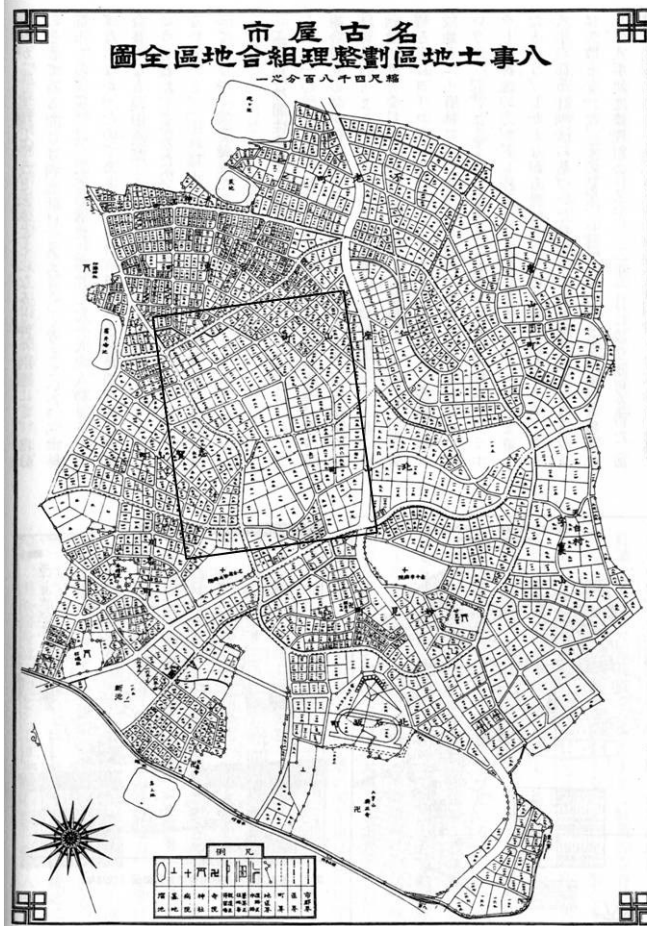
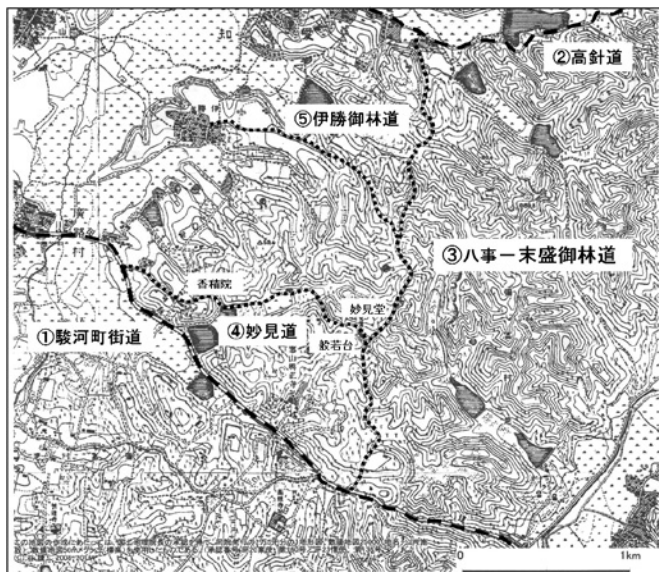
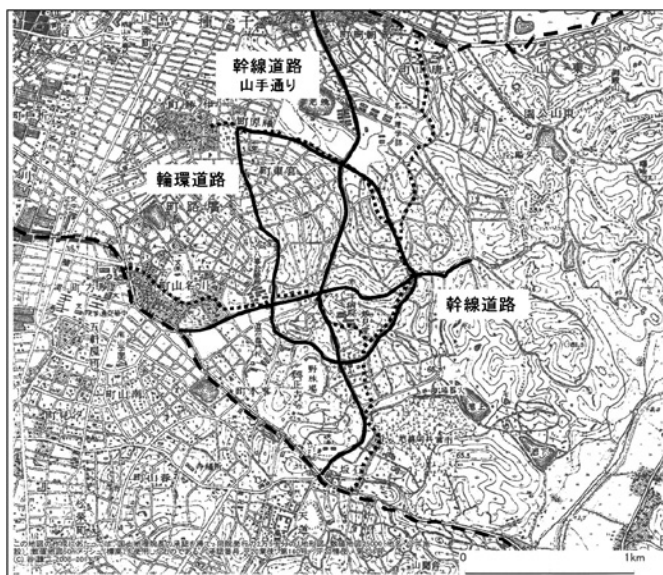


図4 八事土地整理組合地区全図 (1932年)

堀田 (2000: 232) から転載 枠はキャンパス敷地



地図1 明治26年(1883年)



地図2 昭和13年(1938年)

いるので、さしあたり本論でも於保・松原の用いた道路名称を踏襲しよう。

「駿河町街道」①と「高針道」②は、ともに名古屋の市街地から飯田方面へ向かう街道であり、それに対して「八事―末盛御林道」③は両者を連絡する地域連絡路と位置づけることができる。一方「妙見道」④は「駿河町街道」①から枝分かれし谷間を登って妙見堂に達していることからわかるとおり、当時の名古屋の遊山客が郊外の景勝地として名高い社寺（香積院、般若台、妙見堂など）を訪れるのに使った参詣道であることがうかがえる。それに對して「伊勝御林道」⑤は、丘陵地帯の縁に位置する伊勝村から出発して緩やかな尾根道をたどっている様子から、伊勝村の住民が山仕事に利用した生活道路だったと推測されるだろう。同様の尾根道がもう一本、すぐ南側にもある。

さてこれらの道は、都市計画の中にどのように取り込まれているだろうか。

まず気づくことは、八事土地整理組合地区全図において①と②を連絡する新たな幹線道路となった南北の道路（「山手通り」幅員十三間五分¹⁰）は、かつての地域連絡路③よりも西側に、より起伏の緩やかなルートを選びながら新しく敷設されていることである。これは開発が進行中の一九二七年の「八事開発事業の現況」で述べられているとおり、新しい交通機関として自動車が発定されたことが一つの重要な要因となっているのだろう（都市創作会 一九二七・七二）。

この幹線道路とは別に、開発区域を市街地と結ぶもう一本の幹線道路（幅員八間）として、かつての「妙見道」④が再利用されている。「妙見道」は平地から丘陵へと谷間をさかのぼる道で、これが「山手通り」と交わる交点（現在の「八事日赤交差点」）に、区画整理全体のあらたな中心が設定されている。この交点は、等高線を見てわかるとおり東・北・南の三方から排水路が合流する文字どおりの「谷合」で、狩野はその指針どおり「主なる排水系統

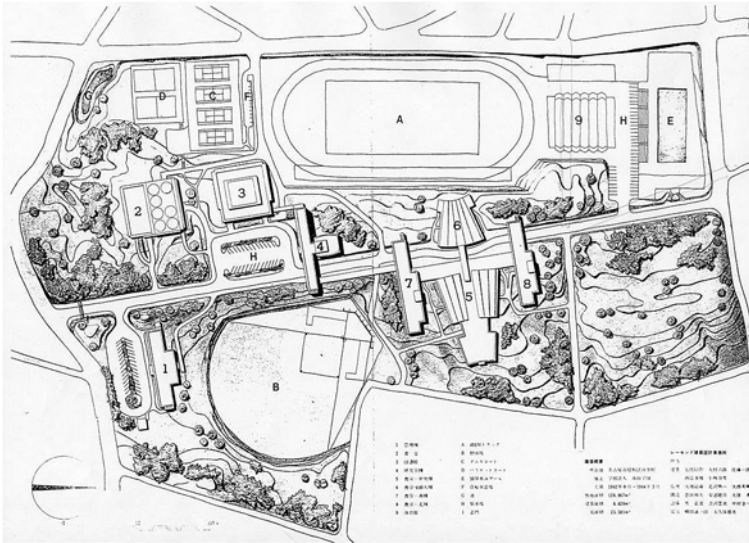
を見つけ」ながら、「市街地との連絡」となる幹線道路を「近い谷合、すなわち排水線と一致する」ように設計したことがうかがえる。

そしてこの交点を中心に、等高線に沿ってぐると一周するように「輪環道路」（幅員平均六間）が設計されている。興味深いことに、この「輪環道路」の東南部分は、かつての地域連絡路「八事―末盛御林道」③をなぞっており、東北―西北部分はかつての「伊勝御林道」⑤を利用している。つまりここで狩野は、「この道（在来からの踏み分け路、木樵の道）は日当たりのいい峯の上か、中腹の如き見晴らしのきく乾いたところを通って居るもので、こういう位置が丘の上の道として自然的にも維持せられ、また将来に亘っていい位置に違ひない」という判断どおり、長く緩やかな尾根道と等高線に沿った中腹の巻き道をつないで、新しい「輪環道路」を作ったのである。^①

こうして直交する幹線道路とそれをぐるりと取り巻く「輪環道路」によって大まかに区画された土地が、さらに住宅地として細かく分けられていく。その際、狩野が留意したのは、「低みの平坦部分は比較的細かく」、「高みの部分や景色に関係ある所は大きな敷地割り」（狩野 一九三二・四二）をすること、^②「単に筆界を画するが如きもの（支線）にありては勾配の許す範囲内に於いて直線を採用」（都市創作会 一九二七・七二）する方針がとられた。

こうした区画割りの基本方針を理解した上で「名古屋市八事土地整理組合地区全図」（図4）とキャンパス配置図（図5）を比較してみるなら、それがそのまま今日のキャンパス周辺およびキャンパス内の道路に重なっていることが読みとれるだろう。山里キャンパスの場所は「輪環道路」に取り囲まれた小高い丘の上に位置していて、「高みの部分や景色に関係ある所」として大きく敷地割りがなされた、区域内でもとくに優良な宅地であった。

なかでも注目されるのは、レーモンドが敷地計画の「最終的解決策」と位置づけた「山稜の尾根道」である。土地整理組合の地図からはつきりと読みとれるとおり、実はこの道は、分筆のために尾根上に直線で引かれた三間五



1 本部棟 2 学生会館 3 図書館 4 研究棟 5～8 教室棟

図5 キャンパス配置図 レーモンド (1964a) から転載

分の支線に外ならない。レーモンド建築設計事務所が現地測量にもとづいて引いた外構工事のための「屋外工事平面図」を見ると、幅員六・五メートルのメインストリートはもともとの支線の幅員三間五分（約六・四メートル）をそのまま踏襲して、両側に二メートル幅の歩道を拡張したものである⁽¹³⁾。

ところが、一九三二年に完成した土地区画整理事業は、日本が戦時体制に入っていく中で入居がほとんど進まないまま放置されることになってしまった。やがて都市近郊の風致地区は防空用の自由空き地として位置づけられることになり（新修名古屋市史編纂委員会 二〇〇〇・七四九、後藤・佐藤 一九九〇・四七〇）、見晴らしのいい丘の上には高射砲陣地が設置された。近隣住民の方々の話によると、今日の川名中学と南山大学のキャンパス敷地にも高射砲陣地がおかれ、古くからある般若台のアカマツの古木は砲撃のじゃまになるという理由で伐採されたという⁽¹⁴⁾。敗戦前後、キャンパス敷地周辺には、結核療養所の他わずか数件の農家

や畜産業者があつただけで、幹線道路も支線も草に埋もれていた。そして敗戦後、山林は上述のように燃料入手のためにふたたび激しく破壊された。こうして郊外の高級住宅地として計画的に開発された丘陵地帯は完全に荒廃したのである。⁽¹⁵⁾

一九六一年にはじめてこの地を訪れたレーモンドは、キャンパス敷地のこのような来歴を知らなかつたにちがいない。しかしだからといって、レーモンドはうかつにも筆界分割の道路を在来の小径と取り違えたということではないだろう。むしろ反対に、一九六〇年代に始まった経済成長とともに都市近郊農村の里山が郊外住宅地に急速に変貌していく中で、そこに立地することになる新しい大学キャンパスは何を新たなランドスケープの要とすべきかという問いが問われていたと考えるなら、レーモンドの直観はすでに三〇年を経て土地の中に埋没していた石川栄耀らの「山林都市」構想の潜在的可能性を、的確に再発見したと評価することができるだろう。

ところでレーモンドの文章を読むと、キャンパス予定地は何もない自然のままの山林だったような印象を受けるが、今指摘したとおりこの場所は周的な区画整理により開発され、分筆され、したがってすでに多くの個人に分割所有されている土地であつた。だからキャンパスを開発する前提として、土地を買収し、とりまとめ、一定の広さの敷地を確保する必要があつた。このように現実の用地は自然や歴史の条件だけでなく社会的・経済的な条件のものにもあり、したがって新たなランドスケープもそうした複合的な条件のもとで形成されていくことになる。⁽¹⁶⁾

四 ネゴシエーション

これまで検証してきた眺望、植生、街路などの要素は主としてキャンパス予定地の立地に関わるもので、建築家はそれを左右することができない。それに対して、選定された場所で実際にキャンパス建設を実行するにあたっては、建築家の取捨選択によって左右できる要素もある。その大部分は立地条件の中にすでに組み込まれているとしても、そのうちのどの部分を建築計画に積極的に組み込み、どの部分を排除するかは、施主との信頼関係やコストの問題がクリアできる限り、ある程度建築家の選択にまかされているはずである。

建築物そのものに関わる選択、たとえば工法、素材、形態、構造などについては、すでに建築家による研究があつて、レーモンドが何にこだわったかは充分明らかになっている（たとえば三沢 一九九八）。それに対して、敷地の形状、土壌の性質、そこにある樹木など、選定された場所での実際の施工にあたって解決しなければならぬ一連の問題がある。それらについて検討していくと、建築家レーモンドが所与の条件との間でネゴシエーションをしながら、新しいランドスケープを作り出して行く様子が見えてくる。

四―一 敷地の形状

レーモンドはそれまでも東京女子大学、国際基督教大学などの設計に携わっていたが、いずれも建築家としての理想を思いどおり追求できないまま、不本意な形に終わってしまった。しかし「シュライバー神父は、非常に限られた予算ながら、名古屋の神言修道会による南山大学のデザインで、ほとんど無限の自由を私に与えてくれた」（レーモンド 一九七〇・二二五七）。レーモンドの意気込みは、きわめて短時間で作り上げられた基本設計と、

施工における妥協を許さない粘り強い努力にあらわれている。建築家の意志は施主と施工業者（清水建設）にもよく理解されて、困難な工事が進められていった。^{①7}

一九六一年八月、学園理事長シュライバー神父はレーモンドに南山大学の移転新築計画の概要を示し、レーモンドはただちに来名して敷地を検分した。大学側からは教育・研究施設に関する基礎的な数値データ（必要とされる教室数、研究室数、図書館蔵書数など）が示されただけで、すべての設計施工監理がレーモンド建築設計事務所に一括して委託された（南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七・一五五―一五六）。

設計の依頼があつてまだ詳しいデータが示される前にまず大学の総合施設についての概略的なブロックプランがいくつか検討される。次に施主から示された数字的な資料を綿密に分析して各建物別の平面計画がそれぞれを担当者をきめてねられる。次に敷地測量図が示されて配置計画を進め乍ら各平面計画を再検討する。……基本的な構造は最初からレーモンドの脳中にあつて、整然とした設計の秩序と統制をもって組織的に順序よくまとめられていく。模型を作ることを云われた時、最終的な設計はすでに決定的なものになっている（五代 一九六四b・九五）。

レーモンドは敷地全体の総合プランを立案し、一九六一年一二月には早くも五〇〇分の一の模型を製作して名古屋に持ちこんだ。^{①8} 写真（図6）に見るとおり、この模型はレーモンドによるキャンパス構想が敷地の地形条件を深く取りこんで一体化したものだつたことをよく示している。これによって大学、学園理事會側は建設計画について具体的な資金計画を描けるようになり、最終的に一九六二年二月に示されたマスタープランにしたがつて新キャン



図6 写真「改訂した最後の模型」

バス建設を実現することが決定された（南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七・一五六）

本論の冒頭に引用したレーモンドの文章に示されたとおり、このマスタープランにおいてもっとも重視されたのは、敷地のもつ地勢上の特性を最大限に活かすことだった。その第一は、あの「尾根に続く小道」とそれによる方位の決定である。

方位そのものはいうまでもなく太陽の運行によって決定されている。だがそれを建物のオリエンテーションに取りこむ際には、敷地の形状と建築物の配置との調整が不可避である。そして山里キャンパスにおいては、それはあの「尾根に続く小道」によって一気に決定された。

レーモンドは長い滞日経験から、建物の正面を西欧建築のファサードとしてではなく、太陽と風を取りこむ開口部として位置づける日本の設計思想を高く評価していた。「私の昔からの基本の考え方からすれば、方位は天与のものである。冬の太陽も夏

のそよ風もその取捨はいずれも日本人の深遠な考え方の中にこそあった」(レーモンド 一九六二・一九)といっているとおりである。

そしてレーモンドはこの設計理念と敷地の形状との幸福な合致を、偶然とはいえ南北に伸びる緩やかな尾根にまっすぐに引かれた道に見出した。レーモンドが直感的に「敷地の背骨のような形」と形容し、敷地計画の「最終的解決策」と位置づけた「山稜の尾根道」は、先に見たように造園技師の狩野が筆界を画するために引いた三間五分の支線で、生活的に利用されてきた在来の道ではない。だが尾根という地形の特性を活かした線引きが、結果的にレーモンドの方位観と合致したのである。

この道と直角に、「各建物はすべて南面して東に一二度ふれるという理想的な方位をもつことになる」(五代 一九六二) ように計画された。これによって建物群全体の配置はきわめて単純かつ明瞭な統一的構造をもつことになった。レーモンドはこの軸に非常に強く固執していて、そのことは建築模型でもマスタープランでも、メインストリートが正門から北門まで一直線になるように、少し西に偏っていた道路の北側三分の一を東寄りに引き直していることからうかがえる。実際今日の北門が、その先に続く在来の道路より数メートル東にずれているのはそのためなのである。¹⁹⁾

レーモンドが重視した第二の地勢上の特性は、土地の起伏である。

この敷地の特性は「不均整」と高低の変化にもっとも適していますので、私はこの特性を活かしてあたかも地下にしっかりと根をおろした植物が枝を張るように、この敷地には地面から建物が自然に育ち広がっているような状態がふさわしいと思います。

不均整と動的なことはあらゆる日本の古美術すなわち陶器、絵画、造園、建築その他すべての民芸の特徴であります。私は特に敷地計画においてこの伝統に忠実であつたと信じています（レーモンド 一九六四 a… 一一六）。

この文章に表明されているとおり、レーモンドは土地の起伏を積極的にキャンパス計画の中に取りこんだ。直線に引かれたメインストリートを中心線に、土地の起伏（英語原文では *variety of levels*）にしたがって左右に「不均整」（同じく *asymmetry*）に建物を配置していくというアイデアは、地勢と建物の取り合いを強力にみちびいていった。その結果敷地の立体的な特性は、完成した建物の構造と機能にきわめてよく吸収されているので、日々そこで働いている者でもそういわれなければ気づかないほど自然なものになっている。たとえば尾根上のメインストリートから緩やかに下っていく地勢は、G棟の設計に見られるように、そのまま階段教室の傾斜に吸収されており、不自然さをまったく感じさせない（図7「教室棟 全体断面図」）。

だがこのアイデアは、アイデアとして単純であるだけに現実の土地の上で実現するには周到な準備と非常に面倒な施工を必要としたにちがいない。建築工事の実務にあたった五代は、「起伏の多い地形は基礎工事の工程が複雑でボーリング地質試験を十数カ所にわたって行い敷地全体の土質断面図を作って杭打計画が進められた」と述べている（五代 一九六四 a… 九六）。

本部棟をのぞくすべての建物は、尾根上のメインストリートから入っていくアプローチの背後に二階、三階の地下部分をもっており、谷側の低地部分に土台をおいている。「屋外工事及び詳細 屋内外トレンチ平面詳細」を見ると、敷地は六〜八メートルのメッシュに区切られて一センチメートル単位で高さが測量され、それにしたがって

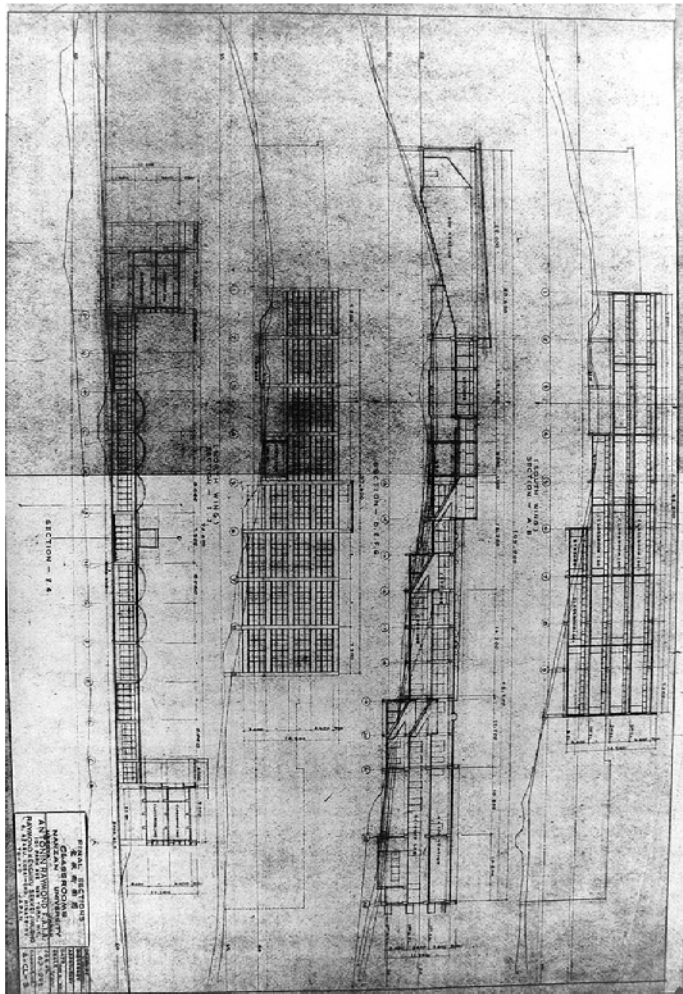


図7 教室棟 全体断面図 (画像は白黒反転)

上3図はH・G・F棟の東西断面、下は全体の南北断面

建物の土台の高さもひとつひとつ一センチメートル単位で指定されているのが読みとれる²⁰。しかも個々の建物の入り口部分の高さは均等でない。屋外工事の実施図面を見ると、連結した教室棟の一階床面は六一・五〇メートルでそろえられているが、その他の研究棟（六三・〇〇メートル）、図書館（六一・五〇メートル）、学生会館（五九・五〇メートル）、本部（六〇・一五メートル）では、それぞれ微妙に異なっている。建物群が起伏する地勢にしたがって緻密な計画によって配置されたことがよくうかがえるだろう。

それでは、建物が配置される前の自然の地形は実際どのようなものであり、配置された建物はそれにどのように追従し、あるいは反対にそれを変形させたのだろうか。ここでは、研究棟、図書館、学生会館について、「屋外工事平面図（第二期工事）」（図8）を詳細に観察しながら検討してみよう。

「屋外工事平面図（第二期工事）」は、建物と地形との取り合い関係を一メートル単位の等高線で詳細に示している。それを見ると、標高六一・五メートルの道路の西側に六四メートルの緩やかな尾根筋の頂上が通っており、そこからさらに西に少し離れて、かなり険しくかつ複雑に入り組んだ崖状の斜面が落ち込んでいたことがわかる。斜面の底部は五四メートル前後で、尾根最上部との落差は約一〇メートルである。研究棟、図書館、学生会館の三つの建物はみな、この斜面の底部に基礎をおき、そこから六一・五〇メートルの均一な平面（駐車場）になるように整地された尾根上部まで、二階建ての構造を立ち上げて入り口を設けている。ところがそうして整地された上部の駐車場面と、斜面底部の土台から立ち上がった建物との間は、埋め立てられずに垂直の擁壁によって隔てられ、隙間のように残された。図9の写真に見るように、図書館と駐車場と間には（今日では地下書庫増設のときに埋められてしまったが）もともと深さ四〜五メートル、幅八メートルの堀のような構造があり、図書館に入るには中世の城郭のように橋を渡っていくようになっていたのである。研究棟の西側半分の地下一階部分が今日でも地下に埋ま

研究棟

図書館

学生会館

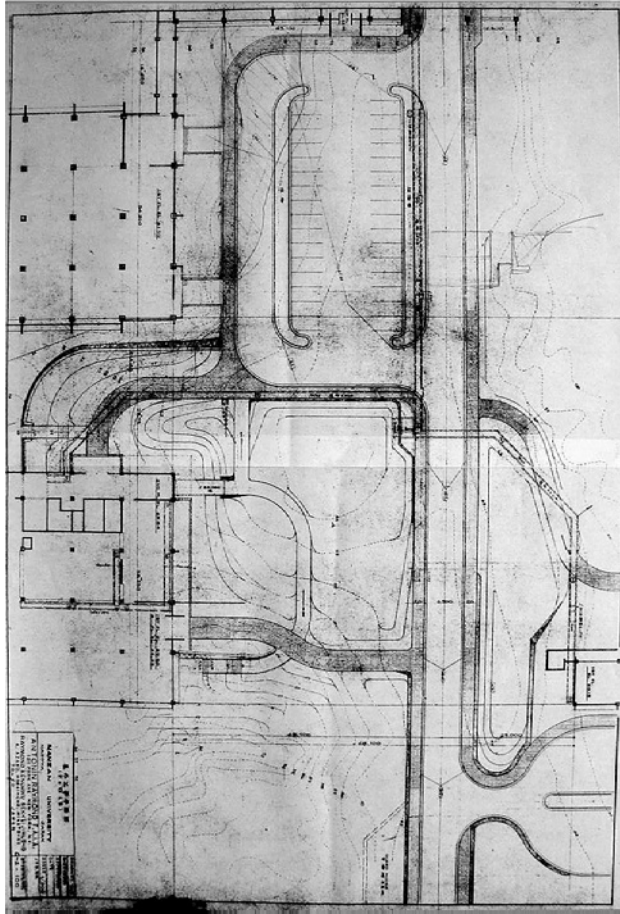


図8 屋外工事平面図（第二期工事）



図9 写真「図書館棟東側 昭和39年」

つておらず、駐車場面と幅約二メートルの狭いトレンチに
よつて隔てられているのは建設当時のままである。⁽¹⁾

なぜレーモンドは整地した上部の駐車場面と斜面底部と
の落差を埋め立てずに、わざわざ建物を取り囲む掘のような
構造として残したのだろうか。ひとつには、そこから地下部
分に自然光を取りこむためという理由があつたかもしれない。
あるいはまた、建物の盛り土の圧力を過剰にかけないとい
う技術的な配慮からであつたかもしれない。しかし建築以
前の地図によつてこの場所のともとの地形を検討してみ
ると、レーモンドがその地形的特徴を意図して残そうとした
のではないかというひとつの推測が生まれてくる。

地図3の左が明治二六年（一八九三年）の五万分の一地図、
右が昭和三一年（一九六五年）の一万分の一地図の部分であ
る。両者の対応関係は、ほぼ中央にある三角点でわかるだろ
う。地図上ではキャンパス敷地を点線で囲み、メインストリ
ートを太線で示してある。⁽²⁾ どちらの地図でも、のちにメイン
ストリートになる尾根の西側斜面は浸食によつて崩落した
崖になっている。もともとこのあたりの土壌は雨で浸食され



明治26年（1893年）



昭和31年（1956年）

地図3 崖の比較

やすい性質をもっているが、地図を見くらべればこの崖は戦中戦後の破壊による結果ではなく、少なくとも六〇年以上存在してきたランドスケープの安定した一部であることがわかる。高層建築など視界をさえぎるものがまだなかった一九六〇年代に、この崖際に立つと名古屋市内から伊吹山、鈴鹿の山々までが広々と見わたせただろう。レーモンドは敷地の第一印象を「その尾根は敷地の背骨のような形をしていました。そこは四方から微風を受け、東西両方向に素晴らしい眺望を持っていました」と書いているが、おそらくこのあたりの崖際に立ったときの印象であるにちがいない。

レーモンドはこの崖を建築にとつての障害物としてではなく、キャンパスの立体構造の基軸として積極的に取りこんだ。すなわち彼は、この半円形にえぐれた崖の下に基礎をおいて土地の起伏の中に建物を包みこむと同時に、建物から少し離れて垂直に立ち上がる擁壁によって崖の落差をあらためて強調する効果を引き出しているのである。こうして彼は、所与の地形としての崖がもっていた垂直的

な強さを建築的構造に置き換えて保存し、あるいは再現しようとしたともいえよう。

四―二 土質

レーモンドに強い印象を与えた所与の「自然」のもう一つの要素として、土壌の性質にも目を向けなければならぬ。とくにそれは、工事の実務にあたった五代や三沢の文章に繰り返し表れているものである。

「地方独特の赤はだをのぞかせ」た「この地方の土質が吸水性に乏しく多量の降雨流出によってエリユージョンを起こす性質がある」(五代 一九六四a)。「土は乾き粘土質で、おそらくは陶器の原料によっても、植物の生育には適していない土地であった」(三沢 一九九八・一八八)。

この土は八事層とよばれる砂礫層で、名古屋東部丘陵地帯の頂部に分布して尾根の面を形成している。とくに高位段丘にあたる八事面は、段丘形成後に風化にさらされていた期間が長く、土壌は酸化して赤みを帯びている。チャート中心の砂礫層の中には、ところどころ粘土層や砂層がはさまっている。そのためこの丘陵地帯は、窯を築くのに最適な斜面と原料となる粘土、そして薪が容易に入手できる地として、古墳時代に須恵器が焼かれたところである(荒木 一九九四、新修名古屋市史編集委員会 一九九七・一〇八、一五一―一五二、二一八―二一九)。

近世以降の東山丘陵は、上述のように山林資源の過剰な利用のために土地が痩せ、降雨による土壌流出で斜面はあちこち崩壊していた。しかもこの赤土は雨が降ればぬかるみになる。このように扱いにくい土壌はそれ自体がまさに、地形の起伏とならんでレーモンドの建築が取り組まなければならない所与の「自然」であった。複雑な土木造成工事は、加藤が書いているとおり、「自然の力の象徴のように横たわったこの大地と戦いであつた」に相違ない(加藤 二〇〇三・五三)。

実際この浸食に弱い土壌をいかに制御するかは、建築工事の実施においてだけでなく、完成後のキャンパスの維持のためにも重要なポイントだったにちがいない。五代が「全面的に芝付植樹を行い、敷地外周を含めて延べ八〇メートルの擁壁、知間石積みを行う等土木造成工事が慎重になされた」（五代 一九六四^a）というのとおり、土壌の流出を抑えるために徹底した手が打たれ、浸食によって崩落した斜面はすべて石積みやコンクリートの土留めによって補強されることになった。

土地の起伏の多さと浸食に対する弱さは、もともと風化した砂礫層という同じ土壌の特性に由来する。その条件に対して、レーモンドは前者を積極的に建築プランに取りこむと同時に、後者を土木工事によって抑えこもうとしたわけである。実際土留めがなされなければ、この土地はどんどん浸食されていき、崩れていく。それは自然の変遷の過程である。だが建築家は、土木工事によって浸食を建築時点の状態に止めおくと同時に、崖状の斜面を建築空間の立体構造の中に恒久化したわけである。

ところで、完成した建物の柱と梁をのぞく壁面に赤褐色の塗料が塗られた経緯については、混乱した情報がある。それは山里キャンパスの土壌の色を取ったものだとする説明があるのに対して、同様の彩色は南山大学以前に「聖アンセルム教会」（一九五四—一九五五、東京・目黒）、「群馬音楽センター」（一九五八—一九六一、群馬・高崎）でも用いられているのである。実際一九六四年に南山大学キャンパスに関する批評文を書いた建築家内田晶は、「レイモンド特有のあのサビがかった赤色の壁」を「レイモンド赤」という表現でよんでいるから（内田 一九六四…八三）、当時すでにこの彩色はレーモンド調と認識されていたのだろう。『南山学園75周年記念誌』は、かつてレーモンド建築設計事務所所属していた三沢浩氏の話として、「これはレーモンド夫人ノエミが選んだ色であり、関東の赤土からイメージされた、ノエミにとつての日本の印象であった」という談話を紹介している（南山学園75周

年記念誌編纂委員会 二〇〇七・一五九。

他方、『中日新聞』一九九七年九月一日付け記事「愛知名作の舞台・南山大キャンパス」（県内総合市民版）は、打ちっぱなしのコンクリートに塗る色の選択段階で、「四種類の土が候補に上がったがなかなか決まらない。適当な色を求め半日、大学周囲を歩き続け」た結果、「この地独特の赤茶けた土」を手にしたレーモンドが、「この建物が扱って建つ大地の色を塗ろう」といって最終的にこの色に決定したと書いている。もつとも当時その場に同行した山本勇郎氏は、色を選んだのはレーモンドではなく妻ノエミだったと証言している。

情報は混乱しているが、矛盾しているわけではない。全体を総合してみれば、打ちっぱなしコンクリートの構造物の柱と梁をのぞく壁面に土の色を塗ること自体は早くから決まっていたが、その色調は実際に現場で手に取った土の色によって最終的に決定された、ということだろう。酸化した古い土壌からなる八事層には、上述のようにどこどころ赤褐色の粘土層がはさまっている。掘り返された現場の土の中にそれを見つけたレーモンドあるいはノエミが、それを選んだ。つまりレーモンド（あるいはノエミ）にとって、問題はたんに「建物の土の色を塗る」ということではなく、「この起伏の多い土地」に建てられた「この建物」に、「この扱いにくい土壌」の色を塗ること、つまり建物の土地との固有の結合のしるしを付与することだったのだと理解できるだろう。

その上で、工事によって裸にされた地面は、土壌の流出を防ぐために石積みや芝植付け、植樹によってできかざり被覆された。つまり、かつての「赤はだをのぞかせた」土地は建築物や造園のしつらえによっておおいかくされ、そのかわりコンクリートの構造物の壁面にあらためて彩色によって再現されたのである。ここにも土地の起伏と同様に、非常に扱いにくい土壌という所与の条件を、一方では実質的に抑えこむと同時に、他方では象徴的に再現するという方法がとられていることに気づかされる。

四―三 樹木

建築にあたって、レーモンドが自然の植物を保存する強い意志を貫いたことは、彼の文章に繰り返し書かれている。

大変美しい景色と植物は出来るだけそのまま保存しなければなりません。もし仮に現状を破壊して全部やりかえるとしたら、勿論相当の年月を要しますし、また例えそうしたとしても絶対に過ちを犯す事のない「自然」という巨匠の手になる作品に敵うものではありません（レーモンド 一九六四a）。

とはいえ「はじめは広がった敷地も特に外構計画が進むに従って、果たして考えていたように緑地が残り自然が残るのか、まったくはらはらするような状況が続いていた。多いと思っていた松が次第に残り少なくなっていく様子は、おそらくだれもが気にしていたにちがいない」（三沢 一九九八・一九〇〇）。その結果、工事進行中はわずか腕ほどの太さの木でも、切るには学園理事長の許可が必要とされるほど厳格に緑地の管理がおこなわれた（南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七・一六〇）。

このエピソードは複数の文献に引用されているだけでなく、一種の口頭伝承としても機能し、その後のキャンパスの維持、整備に影響を与えている。たとえば『南山学園75周年記念誌』は「生物学教授阿江茂から、八事近辺の開発が進み、名古屋東部の原生林で残存しているのは南山大学キャンパスと東山公園の一部であり、学術的に貴重なので現植生を可能な限り残してほしいとの申し出があり、従来のを可能な限り保全し、現在のような植生になった」（南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七・一六〇）と書いている。

しかし着工前の空中写真や建設工事中、完成直後の写真を比較検討してみると、緑地の保存には一定の偏りがあったことがうかがえる。もともと樹木は敷地中央のメインストリート沿いに多く、低地部分はすでに野球場として整地されていたり、土砂の採取や浸食によって荒廃したりして少なかつた。なかでも工事中に目立って樹木が伐採されたのは、敷地内でもっとも標高が高く樹木も密生していた敷地南東部分（本部棟周辺）である。ここには建築現場への入り口と作業員の宿舎（飯場）が設けられたため、工事の都合上思い切った伐採が避けられなかつたのである。それに対して、メインストリート両側の建物群の周辺では、複雑な建築工事にもかかわらず樹木は細心の注意をもって保全された。とくに正門から左右の本部棟と学生会館に向かうアプローチ部分、メインストリートと野球場を隔てる狭い斜面、そしてメインストリートから東西に下っていく道沿いがそれである。いいかえれば樹木は、もともと手をつけない部分は別として、とくにキャンパスの主要な建物群をつなぐ動線にそって保存されたといえるだろう。

つまり樹木は、どの部分でも一律に保全されたのではなく、とくにレーモンドのキャンパス設計の中心軸となつたメインストリートとその両側に配置された建物群との関係で価値的に評価され、保全する部分と伐採する部分がふり分けられていることがうかがえる。所与の樹木はそのまま評価されているのではなく、完成するはずの建物群との関係で価値あるものと評価されたものは残され、そうでないものは価値の対象から外された。こうした処置は物理的なプロセスとしての工事を遂行する以上避けられないことだろうが、注意したいことは、所与の樹木は建築物との関係において評価しなおされ、あらためて動線を彩る建築空間の構成要素に変換されているということである。

ここに見られる選別のプロセスは、地形と土壌について確認したプロセスと並行しているといえよう。土地の起

伏は建築の立体的構造に積極的に取りこまれ、自然的にはそれと表裏の関係にある浸食されやすい土質は土木工事によって抑えこまれた。同じように樹木は建築物と自然との調和を引き立てる部分では細心の注意をもって保全され、それ以外の部分では施工上の理由で処分されているのである。

ところでもし樹木がこのように建物との関係で価値づけし直されて保全されたのなら、建物の方も植物との関係で何らかの価値づけを受けているのではないだろうか。「あたかも地下にしつかり根をおろした植物が枝を張るように、この敷地には地面から建物が自然に育ち広がっているような状態がふさわしいと思います」(レーモンド一九六四a・一一六)というレーモンドの言葉をみれば、そうした考えもあながち見当違いではないように思われる。⁽²⁴⁾

そういう目であらためてキャンパスの建物群を見直してみると、研究棟をのぞいて、他の建物はすべてメインストリートから地上三階以内の高さに抑えられていることに気づかされる。ひとつには、これには法律上の制約があった。当時この地域は地上三階建て、高さ二〇メートル以下という規制のかかった「第一種住居専用地区」に指定されていて、高層の建物の建築には法律上の壁があった。実際高さ二二メートル、六階建ての研究棟の建設には、名古屋市の特別許可が必要だったのである(南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七・一六〇—一六一)。そうした事情があって、結局のところ、メインストリート上に高く伸び上がっているのは研究棟だけで、他の建物はすべて三階建て以下に収められた。

だが建物が低層に抑えられた背景には、法律上の規制だけでなく、設計者の意図も何ほどか関わっていたのではないだろうか。これまでの検証から明らかなどおり、一九六〇年代のキャンパス敷地に背の高い樹木はほとんどまったくなかった。植物はみな背が低く、乾燥した尾根上には実生のアカマツが生え、湿気の多い谷筋は背の低いコ

ナラ、アベマキ、エノキなどが埋めていた。それなら建物も、うねるような起伏にしたがって、低く土地にしたがっていなければならない。⁽²³⁾

メインストリートの東西に階段教室をもつG棟・E棟（現在のG30教室）が、緩やかな斜面にハイマツのように両翼を広げているのを見ると、とくにその感が強い。あるいは工事の必要上樹木が完全に切り払われてしまったG棟とH棟・F棟との間の斜面では、建物そのものがかつての植物のように斜面を低くはっている。こうして教室棟の建物群は、注意深く保全された「低いがよく繁った雑木林」と一体となって、あるいはそれを模倣するように地上低く配置されている。

他方図書館と学生会館は、メインストリートから見た正面は低く慎ましい印象を与えるが、後ろの谷側から見上げる姿は垂直的に力強い。先に「土地の形状」の項で建物と崖との間にできた隙間が埋め立てられずに堀状に残されたことに注意したが、ここにも樹木と建物とのアナロジが表明されているかもしれない。たとえば今日でも、西側から図書館を回りこむ急坂のアプローチを登っていくと、建物の足もとが盛り土にかくれていないために、「あたかも地下にしっかりと根をおろした植物」が地面から力強く立ち上がっているような印象を受けるのである。

こうして建物と土地に生育する樹木はアナロジカルな関係におかれた。樹木は建築空間の構成要素として建物に寄りそい、反対に建物は植物を模倣するように土地に植えつけられ、あるいは樹木とバランスを取って低くしつらえられている。建物と樹木は、こうして新しいランドスケープを構成する相互補完的な要素となったのである。

ただし植物と建物は同じでない。植物は生きていて生長するが、建物はちがう。そのことはキャンパス設計においてどの程度認識されていたのだろうか。設計において樹木と建物が相互に模倣し合い照らし合うように配慮されたとするなら、それは植物が赤土の痩せた土壌と同じようにいつまでも変わらず、低く地をはうように止まると予

想したからではないだろうか。

ところがこのような植物の様態は、二次林の生態系遷移の一こまにすぎない。山林からの収奪がなくなり、林床が落ち葉に覆われて湿気を保つようになる、生物学の教授であった阿江茂名誉教授が書いているとおり、「大木になる性質を持ったアベマキ、コナラ、アラカシ、アカマツが成長を始め、それまで明るかった林床を暗くしてしまった」。第一期の工事終了から数年後におこなわれたキャンパス敷地の植物調査によると、林相はすでにアベマキ、コナラ、アカマツなどの高木とネジキ、ヒサカキ、オアキなどの低木からなる複合的な様相を示し始めている（南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七・五一四）。そして現在では、コナラやアカマツは優に一五メートルをこえる高さになり、低層の教室棟は生長した樹木の間埋もれて採光にも影響がでるほどになっているのである。

レーモンドは、一九六〇年当時のキャンパス予定地の地形、植生を建物群と相互補完的な関係に位置づけて、自然と人工の調和した総体的な建築空間の創造をねらっていた。そのために浸食によって崩れていく土地を土木工事によってその時点の形状に止めおき、背の低い樹木と調和するように建物の高さを抑えた。彼は当時の「低いがよく繁った雑木林」を、瘦せた土壌のせいですと変化しないものと考えたのかもしれないが、実際にはすでにエネルギー革命によって里山としての意義を失っていた都市近郊の二次林は、手を入れなければ急速に変貌していく途上にあつたのである。

五 まとめと展望

以上の検討をおして、南山大学山里キャンパスのランドスケープがどのような経緯で、どのような経過をたどって形成されたのか、大体的様子は理解されたい。検討の過程で、事実関係についてこれまで明確にされてこなかったことをいくつか明らかにでき、キャンパス建設においてレーモンドが自然を取りこむ際に駆使した手法についてもある程度具体的な指摘をすることができた。最後に明らかにしたことを整理した上で、今後の展望を述べておこう。

五―一 明らかにしたこと

第一に明らかにしたことは、レーモンドが「自然を基本として」大学キャンパスを構想した敷地は、当然のことながら手つかずの自然ではなく、近世以降現代までの歴史の中で一連の変容をこうむってきた土地であり、それ自身が自然の諸条件と人間の社会的文化的活動とが混じり合った生成物としてのランドスケープを構成していたということである。都市近郊の丘陵地という立地も植生も、したがってそこからの眺望も、たんなる自然ではなく歴史的に形成されたランドスケープの一部である。

とくに興味深いことは、彼の構想の中心軸となった「尾根道」が、それより三〇年前の区画整理で引かれた計画道路だったことである。レーモンドや五代の文章を読む限り、「尾根道」はこの土地で長く使われて自然条件に溶け込んだ道であり、それを活かしたことがキャンパス構想の成功につながったように受け取れる。だがその背景にあるのは、近世の里山を近代の郊外住宅地に転換しようとする都市開発事業だったわけだ。

レーモンドは敷地のこうした来歴をはっきりとは知らなかっただろう。だが彼はまとまった敷地を舞台に新たな大学キャンパスを一体的に構想するチャンスを与えられたとき、都市近郊の山林の価値を評価してモダニズム建築との調和の可能性を追求しようとした。その結果彼は、放置されたかつての住宅用地という立地条件の中に、一九三〇年代の都市計画グループの仕事を知らないうちに再発見し、再評価することになったのである。その際興味深いのは、里山を郊外住宅地に転換しようとした昭和初期の石川栄耀らの構想に対して、レーモンドの構想がその反対に、急速に変貌しつつある丘陵地帯の自然を保存しようという方向性をもっていたことである。そこには、一九六〇年代初頭という高度経済成長期がまさに始まろうとする時代のインパクトが、レーモンドという建築家の中に引き起こした敏感な反応を感じ取ることができだろう。

第二に明らかになったことは、実際にキャンパス敷地に建物群を配置していったときにレーモンドがとった手法である。敷地の形状、土壌の性質、そして樹木という、施工において彼がとくに注意をはらった要素の検討をとおして、よく似た手法がくり返し用いられていることがわかった。それは自然の条件をたんに受動的に受け入れるのではなく、一方ではそれらを扱いにくい条件として意図的・計画的に制御し抑えこみながら、他方では建築的な技術を駆使して積極的に模倣したり再現したりするというやり方で、建築空間の構成要素に変換して取りこむという手法である。

レーモンドは戦前期から日本建築と自然の美の関係については一家言をもっていた。たとえば一九三五年に発表された「日本建築について」(『レーモンド作品集一九二〇—一九三五』に初出)で彼は、「日本人にとって、自然は生命の秘密を握る鍵でもある。すなわち、多年にわたって人間を守ってきた自然を裏切るべきではなく、常に間違いない指導者として頼りにしてきた。人は、自然のよびかけける材料をえらぶ。木材はその生地のみまで。藁は

床に敷き、砂はかべにぬる」といつている（レーモンド 一九六七・一三）。しかし彼は山里キャンパスの建築において、自然の素材をそのまま使うのではなく、コンクリートという近代建築の素材を用いて、敷地のもつ自然の特性を表象化して建築的要素に取りこんだわけである。

さらにいえば、山里キャンパスの建設における「自然を基本として」というレーモンドの方針は、（レーモンドが批判する近代西欧建築がしてきたように）自然を人工としての建築に従属させるのではなく、また反対に（彼が偏愛した日本建築のように）建築を自然に融解させるのでもなく、それ自体のうちに近代建築と自然という相容れない二つの要素のキアスム⁽²⁶⁾をたたみ込んだものであって、決して単純な自然への心情的帰依ではないということが読みとれるだろう。彼にとつて、自然と人工の緊張をはらんだネゴシエーションこそが、新しい建築、新しいランドスケープを生み出していく原動力になっているのである。

以上の三つの点はこれまで明白に指摘されてこなかったことであり、レーモンド建築または山里キャンパスに関する研究に対して一定の貢献となりうる成果だと思う。それをふまえた上で、この事例研究がランドスケープの民族誌学的理解に向けてどのような可能性を含んでいるか、多少の展望を書きとめて終わりとしよう。

五―二 ランドスケープの構造

冒頭にことわったように、この論文の目的は、山里キャンパスの建設の経過と、その過程で建築家レーモンドがしたことこの検討をおして、日常的なひとの生活活動が展開する空間が、どのような要因によって、どのような過程をたどって成立しました変容するのか、その洞察を得たいということにある。その際は、ランドスケープという語をとくに定義せずに用いた。それは、分析概念を使って現実を裁断する前に、その概念を構成すべき成分を事

例の検討からみちびき出したいと思つたからである。そういう観点から、これまでの分析から引き出せそうなことを以下にまとめておこう。

ひとつは、ランドスケープがたんなる自然の景観ではなく、歴史的な生成物だということである。それは空間に関わる事象であると同時に時間に関わる事象でもあり、自然の条件であると同時に人間の行為の結果でもある。これ自体はあらためていうまでもないことで、多くの論者によつて指摘されている（たとえば人類学の領域では Ingold 二〇〇〇…一八九―二〇八）。だがそれにくわえて、私がこの研究をおして気づかされたことは、ランドスケープがたんなる客観的・対象的な実ではなく、その場に内在して認識し行為する人間をまきこんだ、自己準拠的な構成をもつということである。

キャンパスのランドスケープの形成過程について分析するために、私は手順として大きく二つのレベルを区別したが、それは便宜上のもので実際にはランドスケープは分割できない。そこで分析の手順をふたたび現実にもどしてみよう。そうするとランドスケープがたんなる地理的・空間的な対象ではなく、時間と空間が不思議なかたちで一体となったものであることに気づかされる。

東山丘陵の景観を（その中に自分が立っているという前提で）もつとも大きい空間のスケールで見るとき、遠くに見える鈴鹿や三河の山々は昔から変わらない姿として、いわば地質学的な時間スケールの事象として現れてくる。それよりも少し近い市街地に目を移してみると、たとえば名古屋城が見えたりテレビ棟が見えたりするとうかたちで、景観は歴史的スケールの事象において現れてくる。そして自分が立っている身の回りの空間スケールでは、事物は行為している今という時間のスケールで現れてくる。これは近くのものとは細かく見えるが、遠くのものとは大雑把にしか見えないという、私たちの視覚の性能に還元される問題ではない。私たちは、特別な意図や訓練

を前提にしなければ、自分の手もと足もとにある小石や土に地質学的な時間を感じることはないし、反対に遠くの景色に個人の行為を読み取ったりすることもない。これは私たちの当たり前の経験だが、自分から距離的に遠ざかっていくほど、その場所に見えるものと自分との時間的関わりも遠くなっていくのである。いわば現象学的に反省してみるなら、ランドスケープはこのように時間と空間が連動した同心円状の構造をもっていることが理解できるが、そこからただちに、ランドスケープは即自的な対象物ではなく、認識者⇨行為者の立場を繰り返りこんだ自己準拠的な時間構造をそなえていることが明らかになる。

ランドスケープのこうした時間構造を前提にして、レーモンドが東山丘陵の上に立ったとき、何を見、何をしたか、そしてそこで何が起こったのかあらためて考えてみよう。そうするとそこから、ランドスケープがそなえる時間構造のもうひとつの特性、すなわち実践をみちびく認知的機構という特性がうかび上がってくる。

東山丘陵の上に立ったレーモンドは尾根をわたる微風に吹かれ、遠く三河や鈴鹿の山々を見渡しながら、悠久の地質学的時空においてその場所を感受していただろう。そして彼が何度もくり返して書いているとおり、その感受が足下の時間的⇨空間的スケールにおける建築計画を一気にとらえてしまったわけだ。きわめて興味深いことに、そのとき最遠の山々の眺望と足下のキャンパス敷地というかけ離れた時間的⇨空間的スケールを結び合わせた仲介項は、中間的・歴史的スケールにおいて存在している街路だった。

もちろん彼はこの道の来歴を知らなかったが、それは重要でない。重要なのは、道という構造物は彼がここに来る前からすでにあつたもので、それゆえに「今ここ」にはじめて立った彼をその土地の歴史に媒介するものだということが、そしてまたこの媒介をおして、遠い眺望に感受される地質学的な時間における自然（絶対に過ちを犯す事のない『自然』という巨匠）が、「今ここ」における彼のキャンパス建設にとって現実的なものとなったとい

うことである。

そういう意味で「山稜の尾根道」は、彼にとつて、さまざま異なる時間スケールにおいてすでに存在していた（あるいは潜在していた）要素をとりまとめ、キャンパス構想という新たな全体性へと変容させる媒介となった。しかもその媒介は、将来に向かう実践をみちびいていく動的な媒介となつている。キャンパス「予定地」という未規定の場所は、この道という媒介項によつて建設工事が実行されていく作業空間になる。事実、この直線の道路がすべての計画の基軸になつた。ここからわかることは、ランドスケープの認知的意義である。ランドスケープはたんに意味解釈に関わる静的な認識の対象ではなく、実践をみちびく動的な認識の仕組みであり、将来に向かう時間にかれた実践の手がかりをアフォードするということである。

ところで実践は、不可避的に他の行為者の実践との社会的なインタラクションを巻きこむ。ランドスケープに自己準拠的な認識構造だけを見るなら、それは自己だけに関わる観相的な想念しかみちびき出さないだろう。だがそれを行為へと人をみちびく認知的仕組みとみなすなら、それは必ず他の行為者との協働や反発という社会性を帯びた場になるはずである。遠く悠久の時間へいざなう眺望を味わう認識者は、審美的鑑賞に浸っているかもしれないが、そこに他者はいない。そこに他者と社会性を導入する媒介項は、論理的にいつて中間的な距離にあつて歴史的な時間スケールをになう要素、つまり自分以外の誰かが自分より前にすでにおこなつた実践の結果でなければならぬはずである。²⁷⁾レーモンドの場合、それがあの「山稜の尾根道」だつたと理解できるだろう。そこにおいて、悠久の自然と歴史の時間、そして建築家としてのレーモンドの実践が出会う、いやより正確にいえば、レーモンドの実践とそれに先立つ多くの人々の実践が出会うのである。この出会いにおいて自然の要素と歴史の要素は解きほぐされ、吟味され、あらためて行為者の社会的実践をおして編成し直される。そして実践の結果は、やがて行為者の

手をはなれてふたたび歴史のスケールの要素となるためにランドスケープに送り返されていくのである⁽²⁸⁾。

ランドスケープを、このように不易の自然と歴史の時間を行為者の実践において出会わせる場であると同時に、ランドスケープそれ自体を更新していく実践の場として理解するなら、「自然を基本として」というレーモンドの理念が、近代建築と自然という相容れない要素の緊張関係を動力源として、綿密な計画と困難な工事を推し進めながら、新たなランドスケープを創造していったプロセスがよりよくわかってくるのではないだろうか。

〔付記〕

1. この研究は南山大学二〇一二年度バツへ研究奨励金I—A—2特定研究（研究課題「生活空間のランドスケープに関する日常生活の人類学的研究」）による助成によっておこなわれた。

2. 今回の研究に際しては多くの方々のご協力をいただきました。記して感謝します。

南山大学名誉職員の山本勇郎氏には、キャンパス建設時のさまざまなエピソードを教えていただいた。大学近隣にお住まいの大原鉄男氏、榊原洋治氏、鈴木一三氏には、敗戦前後のキャンパス敷地周辺の様子をお聞かせいただいた。資料面では、清水建設名古屋東事務所の松原靖弘氏に建設当時の図面を見せていただき、コピーを取らせていただいた。また本学情報理工学部准教授高橋洋子氏には、レーモンド建築設計事務所が製作したキャンパス模型を見せていただき、貴重な資料も提供していただいた。

〔文献〕

・資料

1. レーモンドおよび同建築設計事務所のスタッフによるもの（本文中に引用していないものも含む）
 レーモンド、アントニン 一九六二 「南山大学総合計画 名古屋」、『建築』二四巻、一九六二年九月号、一九。
- 一九六四 a 「自然を基本として」、『新建築』三九巻、一九六四年九月号、一一六。
- 一九六四 b 「自然と建築——南山大学の設計について」、日本語訳および英文テキスト、『建築』四九巻、一九六四年九月号、四二。
- 一九六四 c 「日本建築への帰依」、芸術新潮、一九六四年九月号、七六一七七。
- 一九六五 「南山大学——自然と建築」、『建築雑誌』八〇集九五七号、一九六五年八月号、五八九。
- 一九六七 (二〇〇三) 『私と日本建築』、三沢浩訳、SD選書一七、鹿島出版会。
- 一九七〇 『自伝 アントニン・レーモンド』、三沢浩訳、鹿島出版会。
- 五代信作 一九六二 「南山大学総合設計計画の概要」、『建築』二四巻、一九六二年九月号、二一。
- 一九六四 a 「南山大学」、『建築文化』一九巻、二二五号、一一九。
- 一九六四 b 「南山大学の総合計画と平面設計」、『近代建築一八巻九月号、九五—九六。
- 一九六四 c 無題、『建築』四九巻、一九六四年九月号、四五。

2. その他、キャンパスに関する資料

内田 晶 一九六四 「南山大学の建築」、『近代建築』一八巻、九月号、八二―八三。

日本建築学会 一九六五 『日本建築学会賞』昭和三十九年度の表彰業績に対する推薦理由『建築雑誌』第八〇集九五七号、五五四―五五六。

中日新聞一九九七年九月一四日付け記事「愛知名作の舞台…南山大キャンパス」（県内総合市民版）。

3. 都市開発・区画整理関係資料

石川栄耀 一九二七 「八事讚稱」、『都市創作』第三卷一〇号、七一―七六。

木島死馬 一九二七 「八事懷顧」、『都市創作』第三卷一〇号、七七―八五。

加藤光矩 一九二七 「風光美の八事山」、『都市創作』第三卷一〇号、八六―八八。

都市創作会 一九二七 「八事開発事業の現況」、『都市創作』第三卷一一号、六八―八〇。

笹原辰太郎 一九二七 「八事見学会を迎えて」、『都市創作』第三卷一一、八〇―八三。

大名古屋土地博覧会（編） 一九二八 『大名古屋の区画整理』、大名古屋土地博覧会。

名古屋区画整理協会（編） 一九三二 『大名古屋の区画整理』、名古屋区画整理協会。

4. 図面、地図、写真類

『尾張名所圖會』上巻、巻之五（天保一五年一八四五年）、（一八八〇年発行）、愛知県蔵版。

『東郊丘岡地開発計画図』（一九二七年）、『都市創造』第三卷一〇号掲二〇〇〇より転載。

「名古屋八事土地整理組合同有地無償編入図」（一九三五年）、名古屋市政資料館蔵。

「教室棟 全体断面図」（一九六二年四月六日）清水建設名古屋東事務所蔵。

「屋外工事及び詳細 屋内外トレンチ平面詳細」（一九六二年五月三〇日）、清水建設名古屋東事務所蔵。

「屋外工事平面図」（第二期工事）（日付なし）、清水建設名古屋東事務所蔵。

地籍図「山里町」、「八雲町」（除籍年月日不明）、名古屋市政資料館蔵。

写真「改訂した最後の模型」、アルバムK4『新校舎（3）昭和三十九年』、南山大学史料室蔵。

写真「図書館棟東側 昭和三十九年」、アルバムK7『南山大学図書館増設前後 その他』、南山大学史料室蔵。

空中写真 KK592YZ-P20A 国土地理院。

空中写真 USA-R517-No.1 国土地理院。

空中写真 B13-C2-28 国土地理院。

デジタル標高地形図（1：25,000）「名古屋」、D.1-N462 国土地理院。

5. 大学・学園史関係資料

南山学園（編）一九六四『南山学園の歩み』、南山学園。

南山大学五〇年史作成小委員会（編）一九九九『南山大学五〇年史写真集』、南山大学。

南山学園75周年記念誌編纂委員会（編）二〇〇七『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園75周年記念誌』、南山学園。

・研究文献

荒木 実 一九九四 『東山古窯址群』、中日出版本社。

千葉徳爾 一九九一 『はげ山の研究（増補改訂版）』、そして。

後藤健太郎・佐藤圭二 一九九〇 「名古屋市における戦中の防空対策が都市計画に及ぼした影響」、一九九〇年度第二五回日本都市計画学会学術研究文集」、四六九―四七四。

ハイデッガー、M. 一九二七（一九九四）『存在と時間』（上）、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房。

堀田典裕 二〇〇〇 「八事丘陵地／名古屋——山林都市（林間都市）八事丘陵地の住宅開発」、片木篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』、鹿島出版会。

—— 二〇〇五 『都市創作』解説・総目次・索引』、『復刻版 都市創作』別冊、不二出版。

Ingold, Tim 2000 *The Perception of the Environment: essays in livelhood, dwelling and skill*, Routledge, London.

伊藤真司 二〇一〇 「モダニズム建築の保存と活用への提言」、『アルケイア——記録・情報・歴史』第五号、南山大学史料室、七七一―一二一。

加藤富実 二〇〇三 「アントニン・レーモンドと神言修道会の会員たち——南山大学山里校舎建設をめぐる」、『南山大学図書館紀要』第八号、南山大学、四一―五九。

加藤金逸 一九七五 『大空に祈る——名古屋防空隊（高射砲隊）の記録』、『大空に祈る』刊行委員会。

三沢 浩 一九九八（二〇〇七）『アントニン・レーモンドの建築』、SD選書二四六、鹿島出版会。

於保俊・松原輝男 二〇〇五 「近世名古屋東部丘陵地を通っていた古道からの古景観」、『名古屋大学博物館報告』第二二号、一二七―一四〇。

リード、E. S. 二〇〇〇（一九九六）『アフォーダンスの心理学——生態心理学への道』細田直哉訳、新曜社。
 坂井信三 二〇一二「おくということ——ものの配置と設置をめぐる認知的民族誌の試み」、『アカデミア
 文・自然科学編』第三号、南山大学、一一—三〇。

昭和区制施行五〇周年記念事業委員会（編）一九八七『昭和区誌』、昭和区制施行五〇周年記念事業委員会。
 新修名古屋市史編集委員会（編）一九九七『第八卷 自然編』、ぎょうせい。
 新修名古屋市史編集委員会（編）二〇〇〇『第六卷』、ぎょうせい。

高橋洋子 二〇〇七『『南山大学』と建築家アントニン・レーモンド——マスタープラン模型の復元にあたって——』、『アルケイア——記録・情報・歴史』第一号、南山大学史料室、七九—九八。

註

- (1) 第一期工事（一九六二年八月—一九六四年三月）の完了後、
 レーモンドは『新建築』と『建築』の一九六四年九月号に、
 それぞれ「自然を基本として」（レーモンド一九六四a）、「自
 然と建築」（レーモンド一九六四b）と題して南山大学設計
 の基本理念を述べた同一の文章を発表している（後者には英
 語原文がそえられている）。同じ文章は、日本建築学会賞受
 賞ともなつて翌一九六五年八月号の『建築雑誌』にも「南
 山大学—自然と建築」（レーモンド一九六五）と題して再掲
 されている。
- (2) たとえばアントニン・レーモンド『自伝 アントニン・レ
 ーモンド』（一九七〇）、三沢浩『アントニン・レーモンドの
 建築』（一九九八）、加藤富実『アントニン・レーモンドと神
 言修道会の会員たち』（二〇〇三）、高橋洋子『『南山大学』
 と建築家アントニン・レーモンド——マスタープラン模型の
 復元にあたって』（二〇〇七）、伊藤真司「モダニズム建築の
 保存と活用への提言」（二〇一一）など。
- (3) 1:25,000 デジタル標高地形図「名古屋」D1-N462、国
 土地理院作成。http://www.lgsi.go.jp/geowww/Laser_HP/image/

- nagoya_all.jpg
- (4) 愛知県立図書館ホームページにある「絵図の世界」で村松図が参照できる。http://www.aichi-pref.library.jp/gazou/search/index.html。『昭和区誌』(昭和区制施行五〇周年記念事業委員会 一九八七)にはそれを翻刻した地図と解説があり、利用しやすい。
- (5) 雑誌『都市創作』が名古屋の都市開発に果たした役割については堀田(二〇〇五)を参照。
- (6) 「風吹けば鳴海の浦による浪の音聞く山のやまの名よしも」という古歌にあるとおり、八事の名所「音聞山」の名はそこから来ている(木島 一九二七・七八)。
- (7) 後註(14)参照。
- (8) その記録は二種類ある。第一は開発が進行中の一九二七年に開催された「八事山紹介」の催しにあわせて都市計画グループが工事の経過について説明した「八事開発事業の現況」(『都市創作』三巻一〇号)で、同三巻一〇号には「東郊丘岡地開発計画図」が掲載されている。第二は一九三三年に事業がほぼ終了した段階で、そのノウハウを他都市の都市開発に役立てるために名古屋区画整理協会がまとめた小冊子『大名古屋の区画整理』である。
- (9) 地図は埼玉大学人文学部の谷謙二氏が開発した「時系列地形閲覧ソフト 今昔マップ2」から転載させていただいた。記して感謝します。
- (10) 幅員十三間五分の道路は、都市計画法(一九二〇年、大正九年)によって定められた「二等大路第三類」(新修名古屋市史編纂委員会 二〇〇〇:二五一)にあたる。以下、道路の幅員は「名古屋八事土地整理組合国有地無償編入図」(一九三五年)(名古屋市政資料館蔵)による。
- (11) 地図3右に見るとおり、区画整理による「輪環道路」の西側部分は、標高約五九メートルのピークを避けて大きく迂回していた。この道路は後に直線につけ替えられたが、キャンパス建設工事ではこの迂回部分を敷地に取りこみ、ピークを削りこんで四〇〇メートルトラックのための整地がおこなわれた(南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 二〇〇七:一五四)。
- (12) 後出図8参照。
- (13) またメインストリートに直交してキャンパスを東西に横断する道も、区画整理の支線をほぼそのまま利用したものである。
- (14) 加藤金逸著『大空に祈る——名古屋防空隊(高射砲隊)の記録』(一九七五)を見ると、昭和二〇年七月末の「防空部隊配置図」(二一〇—二二〇)にはじめて「川名山」の地名が登場するので、陣地の設置は戦争の最末期のことだったらしいことがわかる。高射砲陣地は工事で削られて陸上グラウンドになった敷地西側の高地にあった(南山学園創立75周年記念年誌編纂委員会 二〇〇七:一五四)。

(15) キャンパス建設前の状況について、山本勇郎氏は本来幅員二五メートルある「山手通りは、道路の境界もはっきりしないほど雑草が生い茂り、人々は、約五〇センチ幅の泥道を歩いた」と回顧している（南山学園創立75周年記念年誌編纂委員会 二〇〇七・一五三）。近隣住民の方の話では、敗戦直後の食糧難時代、幹線道路には無秩序に野菜畑が作られていたという。さらに一九五九年（昭和三四年）九月の伊勢湾台風のあと東山丘陵の各所で被災地の復興のために土砂が採取されたが、住民の方の話によればキャンパス予定地もその対象になった。

(16) 学園理事会は昭和十三年（一九四八年）に「将来の大学移転を考慮して楽園町、八雲町、山里町、山手通り、滝川町にわたる約十万坪を購入する案を採択」（南山学園 一九六四・九五）したので、最初の計画では敷地面積が二倍近くあったことがうかがえる。敗戦直後の時期アメリカからの援助を期待できる南山学園にとつて、東山丘陵はまとまった土地を安価に確保できる好適な場所だった。ランドスケープの形成を民族誌的に究明するためには、こうした政治経済的側面を明らかにすることは大変重要だが、本論では扱わない。用地取得の経緯については、『南山学園の歩み』（南山学園 一九六四）、『創立75周年記念年誌』（南山学園創立75周年記念年誌編纂委員会 二〇〇七）の他、加藤（二〇〇三）に詳しい。

(17) 第一期の工事終了後、レーモンドは次のように書いている。「この計画の成功の大部分は大学当局の忠実な協力と、建築家の仕事に対する並々ならない理解によるものであると私は感じております。成功に寄与した今一つの要因は工事を請負った清水建設株式会社のもっとも忠実な施工であり、私はこのことに対しても同様に感謝しております」（レーモンド 一九六四a）。

(18) 現存する模型本体の側面に、「10 DEC. 1961」の日付が記入されている（高橋 二〇〇七・九二）。

(19) 敷地の北に予定されていた体育施設の建設は、第二期工事でおこなわれることになっていた。そのため第一期工事が始まった一九六二年の段階では、その部分の市有道路の土地交換がまだ終わっていなかった。ところがレーモンドはそれを持たずにメインストリートを直線につけ替えてしまったので、市当局とトラブルが発生したという（山本勇郎氏談）。名古屋市政資料館に保存されている「地籍図 山里町、八雲町」（除籍時期不明）を見ると、第一期工事分の敷地は市有道路も含めてすでに取得済みだが、第二期工事分の敷地取得にはまだ手がついていない状態が読みとれる。

(20) 一九四七年の米軍による空中写真には爆弾のあとが点々と見て取れるが、レーモンド建築設計事務所作った図面にも、直径約八メートル深さ約五〇センチメートルの爆発痕がG棟北側に四つ正確に描きこまれている。

- (21) 図8の駐車場面には、整地して斜面を埋め立てる部分が鉛筆書きの斜線で示されている。図上部には、図書館入り口の堀と土留めの擁壁の断面図が同じく手書きで描き込まれているのが読みとれる。
- (22) 一九五六年の地図では、すでに野球場として使用されていた敷地東側部分だけ整地されているのがわかる。
- (23) レーモンドの建築にデザイナーとしてつねに協力していたノエミ夫人は、いつもそういうやり方をしていた。三沢は「ペイントの色合わせに石をひろってこの色と示し、やや水にぬらした泥をすくって塗装の見本にすることなど朝飯前」だったと書いている(三沢 一九九八・二二二)。
- (24) レーモンドによる「自然と建築」(一九六四b)の英語テキストを読んでみると、彼が地形と建物との関係を、非常に単純でかつ深い植物的なアナロジーによってとらえていたらしいことが感じられる。[a design depending on] the very nature of the ground dictated "asymmetry" and variety of levels, fitting the ground and seemingly growing out of it like the vegetation, attached to the ground like by roots.
- (25) 高層建築を避けたキャンパス設計には、大げさなモニュメントを嫌ったレーモンドがつねに重視していた「ヒューマン・スケール」の考え方も関わっているだろう(レーモンド 一九六四c・七六―七七、cf. 内田 一九六四・八三)。
- (26) キアスム(仏 *chiasme*)、カイアズマス(英 *chiasmus*)とは「交差対位法」、「対句変換法」などと訳される対句の順序を交差させる修辞法で、ギリシャ・ローマの古典や旧約聖書の修辞などによく用いられている。
- (27) 自分以外の誰かが自分より前におこなった実践の結果をとおして他者と出会うというこの認識の構図は、ハイデガーが身の回りにおける用具存在とともに他者を見出すとした現存在の構図と同じ構造になっていることに気づかされる(ハイデッガー 一九九四・二五八―二五九)。
- (28) ランドスケープは行為とその結果を介して社会性を繰りこんだ場であるという認識は、地理学的なランドスケープ論から人類学的ランドスケープ論への橋渡しとして重要であると同時に、リードらの生態心理学的な環境のとらえ方(リード 二〇〇〇)とも重なってくる。ただし地理的であると同時に歴史的であり、社会的であると同時に認知的でもある場としてのランドスケープの民族誌学への展望は、本稿の枠を大きくこえてしまうので別稿にゆずりたい。

La nature qu'a vue l'architecte Antonin Raymond : une étude ethnographique sur la transformation d'un paysage

SAKAI, Shinzo

Résumé

Le campus Yamazato de l'Université Nanzan va fêter son cinquantième anniversaire dans quelques ans. C'est Antonin Raymond, un architecte moderniste américain d'origine tchèque qui a dressé le plan du campus et l'a réalisé dans le paysage des collines en un groupe de bâtiments unifiés par une voie centrale.

Ici nous allons reconstituer les étapes de construction du campus en utilisant les documents publiés ou conservés dans les archives. Comment Raymond a-t-il rencontré le site du terrain et de quoi s'est-il inspiré le future campus ? Comment a-t-il reconnu les conditions botaniques, géologiques ou historiques du terrain et comment les a-t-il modifiées ou conservées pour réaliser un nouveau paysage de l'université ? Telles sont les questions que nous allons vérifier. Nous analysons, en utilisant la méthode ethnographique, les différents aspects de la rencontre avec la nature d'un architecte et sa lutte pour former un nouveau paysage.